

## ■老人読書もけっこう過激なのだ

三年まえに七十歳をこえた人間としていわせてもらおうが、六十代は、いま思うとホンの短い過渡期だったな。五十代（中年後期）と七十代（まぎれもない老年）のあいだに頼りなくかかった橋。つまり過渡期。どうもそれ以上のものではなかったような気がする。

読書にそくしていうなら、五十代の終わりから六十代にかけて、読書好きの人間のおおくは、齢をとったらじぶんの性にあった本だけ読んでのんびり暮らそうと、心のどこかで漠然とそう考えている。現に、かつての私がそうだった。

しかし六十五歳をすぎる頃になるとそんな幻想はうすれ、たちまち七十歳。そのあたりから体力・気力・記憶力がすさまじい速度でおとろえはじめ、本物の、それこそハンパじゃない老年が向こうからバンバン押しよせてくる。あきれほどの迫力である。のんびりだって？　じぶんがこんな状態になるなんて、あんた、いまはまだ考えてもいないだろうと、六十歳の私をせせら笑いたくなるくらい。

では、幻想ぬきの老人読書の現実とはどんなものなのか。実例としてまず頭に浮かんだのが大岡昇平の『成城だより』である。

むかし『文學界』に連載されたものを時々読んでいたのを勘定に入れば、私はこの公開日記をこれまでに三回か四回は読んだと思う。べらんめえのインテリ老人が、くる日もくる日もベッドにもぐりこんで、あれこれの本に読みふける。その場面に繰りかえし接するのがそれだけでたのしかった。

ひさしぶりに講談社文芸文庫版で同書をひらくと、期待どおり、たちまちこんな記述にぶつかった。一九八〇年一月九日。水曜、曇り、などとあって、

午後一時～三時、暖かい間に客に会い、娘、息子夫婦、孫たちと遊ぶだけ、あとは寝て本ばかり読んでいる。天気よく暖かい日の、同じ時間帯にたまに机に向う。書か読むかのほかに、することなきなり。かつて正宗白鳥先生が、最後まで読書欲旺盛、執筆絶えざりし心理のいくぶんかがわかる。ただし筆者は先生よりよほど早く病弱になり、ぼけてしまった。

風邪がこわい。わが心不全は弁膜症から来る心房細動というやつにて、同病者に澤地久枝女史あり、女史の方が重症だが、驚異的に動き回り、書きまくっている。若さの力なり。うらやましきことなり。こっちは齢だからだめなのなり。

あいかわらず、たのしく読める。でも、そのたのしさの質が以前とはちがう。

以前、つまり中年のころに読んだときは、大岡昇平という人物を掛け値なしの大老人と感じていた。おまけにその印象にはかなりの量のあこがれ（老年幻想）がまじっていた。

でも、いまはちがう。もっと現実的なことが気にかかる。老人だったことはわかるけれど、でも大岡さん、このときあなた何歳だったのかね。巻末の年譜には一九〇九年（明治四十二年）、東京牛込区（現新宿区）生まれとあった。とすると、このとき七十歳。ハッハ、やっぱりね。大岡さん、いまの私より三つも若かったんじゃないの。

そうなるとあこがれの量は大幅に減り、かわって同輩としての親愛感が生じてくる。

一昇平クンとちがって同年配の私には息子も孫もいない。したがって、こんな正月

の団欒は私にはない。昇平クンのような本格的な病いもないかわりに、近年、全身がやけにかゆく、かゆみ止めのくすりのせいで、いざ本を読もうとベッドにはいっても、あつというまに眠ってしまう。そんなちがいもあるにはあるが、基本はまア、おなじようなものよ。

\*

正宗白鳥の話がでてくる。

勉強家の白鳥が死ぬまで本を手ばなさなかつたということは私もぼんやりと知っていた。でも実際にどうだったのかは知らない。

男の老人はおおむねセッカチだから、大岡日記を読むのを中断して、ただちに図書館に向かった。必要な情報を得るのにインターネットだけでは足りない。私は近所の図書館のヘビーユーザーでもあるのだ。奥の棚にあった『正宗白鳥全集』（福武書店版）にあたると、大岡の記述とはすこしズレがあるが、白鳥が死の年に産経新聞によせた「文字の忘却」という小文が見つかった。

私は、少年時代から、英語修業に最も力を注いだのであつた。中年以後、多少フランス語を学ぼうと心がけ、英語よりもむしろこの方に魅力を感じずるやうになつたのであつた。しかししだいに歳の進むにつれ、頭脳が衰へるせゐか、外国の文章を読むのはたどたどしく、せつかく覚えてみたさまざまなことばも忘れがちになり、いまではフランス語どころではない。肝心の英語も、急速度で忘却への道をたどつてゐる。絶えず読み書きしてゐる日本の文字も日に日に忘れつゝあるやうである。

白鳥は八十三歳。このすぐあとに膵臓癌による全身衰弱で死ぬ。おなじ年、『文藝』に連載した「白鳥百話」という随筆にも、あたらしくでた『ギリシア悲劇全集』（呉茂一らの翻訳で二年まえに刊行がはじまつた人文書院版であろう）を読もうと思ひ立ったのに、「読書力の著しく衰へだした私は、（略）心の疲れを覚えて、その悲劇の奥底に藻漚り込むことは出来さうでなくなつた」という一節がある。読みつづけるつよい気持はあつても、「最後まで読書欲旺盛」という具合にはいなくなつていたらしい。

ちなみに大岡昇平が七十九歳でなくなつたのが、さきの引用からかぞえて八年後、昭和が終わる前年の一九八八年である。死因は脳梗塞。あの日記を書いたころは、「ぼけた、もうだめだ」と自嘲しながらも、マンガから最新の哲学書や数学本まで、外国語のものもふくめて大量の本をベッドで濫読していた。ただし、なくなつたときどんな状態だったかは不明。いずれにせよ読書の最中にひっそり逝くというふうではありえなかつたらうが……。

とにかくこう並べてみると、のんびりどころか、大岡の「風邪がこわい」や白鳥の「頭脳が衰へる」など、老人の読書生活には、けっこう屈託の多いらしいことがわかつてくる。

そしてさらにいうと、手足や内臓の機能がこわれ、記憶力や集中力が容赦なく失われていくといった事態のさきには、幼年期にはじまる長い読書生活の終わりという現実が待ちかまえている。白鳥はこう書いた直後、大岡であれば八年後に、それぞれの

人生のヴァニシング・ポイント（遠近法でいう消失点）を迎えた。かさねていうと、前者は八十三歳、後者は七十九歳一。

とすれば、とうぜん私もと考えるしかない。かれらと同様に、とうぜん私も、あと十年ほどであっけなく消滅してしまうのだらう。じじつ、私のまわりから同年配の友人や知人がつぎつぎにすがたを消していった。じぶんのうちに占める死人の割合が七十歳をさかいに確実にふえてゆく。いってみれば半幽霊である。もはや「われはこの世の者ならず」同然の身なのだ。

一と、うっかりそんなことを口にして、親切な人に、バカいいなさんな、吉田秀和なんか百歳ちかいののに、知的にはまだしっかりしたものじゃないか、とたしなめられた。

なるほど、いま九十八歳の音楽評論家、吉田秀和氏は、鎌倉のどこかで、あいかわらずたくさんの本を読み、かずこそ減ったが、いっこうに狂いを見せない端正な文章を書きつづけている。でもね、おことばですが、あんな人は例外中の例外なのよ。とうていわれわれごとき凡人の基準にはならんよ。

\*

八十歳まではなんとか生きられるかもしれない。でも百歳まではむり。女はともかく、男の場合、九十歳だってほぼ確実にだめだらう。

そういうと、なんだか暗い一方の話にきこえるだらうが、半幽霊の感想としては、じつはそうでもないのである。

ここまでくれば、もはやどこにも逃げ道はない。そうときまったことで、ふわふわと頼りなかったじぶんの人生の底に、思いがけず固い岩盤が出現した。へえ、齢をとるとはこういうことでもあったのかとおどろいた。ならば今後はこいつを頼りに死ぬまで生きていくとしようか。暗いとか滅入るといふよりも、どちらかといえば、そうした思いのほうにちかい。

そしてその目で見ると、大岡昇平にしても正宗白鳥にしても、「疲れた」とか「もう齢だ」とか、だらしなく愚痴をこぼすわりには、死をまえにしたかれらの読書にただよう空気はけっこう明るい。

若いころの読書には無限の未来があった。その錯覚は六十代の半ばぐらいまでは辛うじてつづいたが、七十歳をこえればもういけない。じぶんの死がすぐそこに迫っている。のこされた限りある時間に、はたして私はあと何冊、本が読めるだらうか一。

でも、この種の自問は本好きの人間が人生の最終段階に足を踏み入れるさいの形式的な手続きみたいなものだから、結局は、いままでの読書習慣をそのままつづけることになる。

大岡はもともと新しいもの好きの濫読派なので、レイプ裁判とか、ルイーゼ・ブルックスとか、『地獄の黙示録』研究とか、富士山の歴史とか、数学的世界観とか、あいかわらず、こまめに新しいテーマを発見しては、本や資料をかきあつめてベッドに持ちこむのをやめない。

白鳥は白鳥で、濫読という点ではおなじだが、読みのこしの古典（たとえばギリシヤ悲劇）を生きているあいだにできるだけ読んでしまおうというような、いかにも明治生まれの秀才らしい教養主義的読書の習慣をどこまでもつらぬく。

それぞれに性格やそだった時代によるちがいがあある。でもどちらも大まじめで、過激で、そこからおのずからなるコッケイ感がただよいだす。読んでいて思わず笑ってしまう。かれら自身も苦笑いしていたのではないか。いまやあの頃のかれらとおなじような年齢になった私には、その笑いこそが救いである。死も老衰もただの惨劇ではない。やりようによっては喜劇や笑劇にもなりうるのである。

(追記) 吉田秀和氏はこの稿を書いた半年ほどのち、二〇一二年九月に没した。享年九十八。いま最後のころの文章を読むと、おやおや、行文に多少の乱れがあるぞ。